

パナソニック・イズム  
**ism** モノづくりスピリット  
発見マガジン **Archives** アーカイブ

SHARE ▶ コンテンツ一覧 ▶ このサイトについて

isM トップ > 深澤直人と挑んだ「日本のお風呂」改革プロジェクト ~イーユとイークス~

※過去に掲載された記事になります。内容は公開時のものであり、最新の情報とは異なる場合がございます。

# 「日本の、お風呂」 深澤直人と挑んだ 改革プロジェクト

イーユとイークス

構成・執筆 カワイイファクトリー

プロダクトデザイナーの深澤直人を迎え、  
お風呂のデザイン改革に取り組んだ  
松下電工のデザイナー、技術者、  
営業担当者のモノづくりにかける  
情熱と苦闘ぶりを紹介。約四年にわたった  
バス革新プロジェクトの全貌に迫ります。

## 第一章 本山仁のリベンジ

## 第二章 渡辺雅純の開眼

## 第三章 森内文夫の決断

## 第四章 堀江靖の苦悩

## 第五章 河村晃宏の逆転

HTML版はこちら

Get ADOBE FLASHPLAYER

このコンテンツをご覧になるには  
最新版の Macromedia Flash Player が必要です。

プロローグ

スタッフへ / FLASH版へ / HTML版へ

このコンテンツ、あなたの評価は？  おもしろい  ふつう  おもしろくない 送信

contents 一覧 | このサイトについて

ism トップ



# 「日本の、お風呂」 改革プロジェクト

深澤直人と挑んだ  
「イーユ」と「イークス」の

デザインを軸にした  
モノづくり改革物語

その昔、日本には大きな桶を土間に置き、  
薪をくべてお湯を沸かしたお風呂があった。

野外に置いたドラム缶風呂というのもあった。多くの人が銭湯に通った。  
やがて、高度成長期になるとどの家にも内風呂がつくられるようになり、  
工場で成型され現場で組み立てるユニットバスが主流となつた。

快適さ、清潔さ、便利さを追求し、

やり尽くされた感があつたお風呂のデザインと合理化。

だが、本当にそうちどうか？ 日本のお風呂はこれでいいのか。

世界でも指おりのお風呂好き日本人が

現代生活に求めるお風呂はほかにあるはずだ。

そんな思いからスタートしたのが松下電工の「バス革新プロジェクト」だった。

日本のお風呂の新しいスタンダードをめざし、完成したのは

二戸建てシステムバス「i-U(イーユ)」と、

集合住宅システムバス「i-X(イーカス)」。

注目のデザイナー、深澤直人の起用を起爆剤に、

社員の意識やモノづくりの仕組みまで改革し、完成へと至る道のりには、  
プロフェッショナルたちの足かけ四年におよぶ戦闘の物語があった。

- 一章 本山仁のリベンジ
- 二章 渡辺雅純の開眼
- 三章 森内文夫の決断
- 四章 堀江靖の苦悩
- 五章 河村晃宏の逆転

読む

読む

読む

読む

読む



# 「日本の、お風呂」 改革プロジェクト

深澤直人と挑んだ  
「イーユ」と「イーカス」の

構成執筆  
カワイイプラトリー  
原田環  
中山真理



A photograph of a man with dark hair and glasses, wearing a white dress shirt and a patterned tie. He is sitting at a desk, looking down and holding his head in his hand, appearing to be in a state of stress or exhaustion.

次ページ

05/10

前ページ

 目次

 プリント

 閉じる

# 挽回

た。このままでは社員が外部とコラボレーションし成長する機会が失われてしまう、そんな危機感を抱いていたのだ。

今度こそ成功事例をつくらないと。今度はデザイナーとしてではなく、ファシリテーターという役割に徹してみよう。たぶんそれこそが、俺にしかできないスキルじゃないだろうか。そう考へると、本山はようやく一筋の光が見えてきたような気がした。

九月のある午後、東京・汐留の松下电工本社ビルの近くのスターバックスに、本山はひとりの女性を呼び出した。

次ページ

06/10

前ページ

 目次

 プリント

 閉じる

「デザインディレクション、B&B ITALIAやドリアデなどを手がけ、

二〇〇七年にはVittoria editionに参加、イギリスの有名な出版社から作品集を上梓するなど日本を代表するデザイナーとして知られている。

〇三年当時は自らの事務所を設立したばかり。九九年に手がけた

「MUGI」CDプレーヤーの「デザイン」で、その存在が一般にも注目され初めっていた。

# 初手

「先輩に紹介されて、お会いしたの」と伊東。「ちょうど来

日していたイタリア人の評論家と一緒に。その彼が、フカサ  
ワは鋭い論客で、ロジカルに状況を把握できる人だと感服し

次ページ

08/10

前ページ

目次

プリント

閉じる

日本のお風呂  
改革プロジェクト  
（イーユビイークス）

一章 本山 仁のりべんじ

なんでも好きなことを、と言わても。デザイナーの自分にできることは何だろう。それを考えつかないと始まらない。異動してきてから、本山にはそれまでのよう手を動かしてデザインすべき案件はなかった。立て込む打ち合わせも締め切りもなく、電話もかかるこない。下手すると「あ、本山、いたの?」と言われかねない毎日だ。

つまり俺は、ほつたらかしにされてるつてことなんだな。

自分の置かれた状況に、本山は暗闇のなかにひとり取り残されたような寄る辺なさを感じた。怖かった。自分に何ができるのか。どのような価値を提供できるのか。ともかくその何かを見つけないと、会社での自分の存在理由がなくなってしまう。

午後二時の日差しはまぎれもない夏の強さで、樹きりと地面に落とし、オフィスのコンクリートの

日本のお風呂  
改革プロジェクト  
（イーユビイークス）

一章

本山仁のリベンジ

という現実の苦さを味わった。バブル景気が去ると、日本のメーカーの外国人デザイナー登用ブームも下火となり、そして「ココ」は九八年一〇月に廃版になった。

会社には貢献できなかつたけど、イタリアでの経験は、得られるものがたくさんあつたなあ。

本山は思い出す。「太古から変わらない人間の習性のひとつは、火の周りに集まるということだ。だから立派なダイニングルームよりも、キッチンにいるほうが落ち着くんだよ。火の周りに人が集まるというキッチンを考えなければいけない」というソフトサスの言葉を聞いたときの感激。優秀なスタッフたちの態度に接し、自分が裸にされたような気持ちに

日本のお風呂  
改革プロジェクト  
（イニシアチブ）

一章 本山仁のリベンジ

リストには、ヨーロッパを中心に著名なデザイナーたちの名前が並んでいた。その中に、深澤直人という名前があった。  
伊東が言う。「でもね、湯船の外で身体を洗う日本のお風呂って、文化的条件がかなり強いでしょう。だから歐米のデザイナーには難しいと思う。本山さんはこのプロジェクトをどうしたって成功させたいわけでしょう。だったら日本の水廻りの文化を熟知した設計者がいいんじゃない？」

そのときまで、本山自身の候補リストに深澤は存在していなかった。

深澤直人  
ふかざわ なおと

一九五六年生まれのプロダクトデザイナー。

八九年に渡米し、IDEO（サンフランシスコ）に勤務後、九七年に帰国し

革プロジェクト  
日本のお風呂  
イニシアチブ

一章 本山仁のリベンジ

分の責任で予算も確保しています。駄目ですか」

「まあまあ、そう力まずに」。深澤の返事は穏やかだつた。

「とても興味深い提案です。喜んでお受けしたいと思います  
から、まずは、いろいろお話するところから始めませんか」

こうして本山は、最初の布石を打つた。そして第二手として、優秀な社内の担当デザイナーを直接指名した。深澤が提案するデザインコンセプトを具現化するには、受けて立つ社内デザイナーも優秀でなければ話にならないからだ。住建のデザイン部門にいた渡辺雅純の評判を耳にすると、本山はすぐさま、バス革新プロジェクトの専属としてもらえないかと渡辺の上司に直談判して了承を取り付けた。

プロジェクトがとうとう動き出した。深澤直人はどんなデ







